



## みんなで守ろう創ろうビオトープ

いわの たいぞう  
岩野 泰三（友の会会員）

### 自然からの恵み

私が幼少期を過ごした昭和30年代から40年代初期にかけて、徳島市渭北地区には、田んぼや野池が至る所に点在し、農家には農耕用の牛が飼われていました。当時まだ未舗装だった旧国道11号線の北側には、広大な湿田とアシ原が堤防まで延々と続き、今では珍しい水上飛行機が吉野川河口に発着する姿も見られました。

思えば、ここ30年の間、私たちの生活が便利で快適になるにつれて、身近な自然環境は大きく様変わりしてしまいました。その結果、バランスを失った環境からの警告なのか、子供達の間にはアトピー性皮膚炎やぜんそく、様々なアレルギー性疾患しっかん、心の荒廃などの問題が起き、深刻な社会問題となって今日に至っています。

こうした自然環境の悪化は、未来を担う子供達になの将来に大きな不安を投げかけています。



阿波町メダカの里

### ビオトープ

自然界に生きる生物は、お互いに関係し合い複雑な生息環境を作り出していることは周知のとおりですが、その多様性を重視することは、自然環境を考える上で非常に重要なこととされています。

そうした中で、近年、ビオトープという概念が注目されていることをご存知でしょうか。

「ビオトープ」とは簡単に言うと「様々な野生生物の生息・生育空間」のこと。最近、マスコミにも大きく取り上げられている「里山のシイ・カシ林」などの整備や、自然とのふれあいの場として身近な自然の再生を目指した「トンボ池」や「メダカ池」などの創出、あるいは貴重な湿原の保全など一連のボランティア活動は、「生物の多様性」を基本に「人と自然との共生」を目指す「ビオトープ」づくりと言えます。

県では、この取り組みの大切さを広く県民に理解していただき、県市町村はもとより地域住民や事業者、学校などが共に協力して、現存するビオトープを守ること（保全）、機能が低下したものを元に戻すこと（復元）、そして新たにつくること（創出）を県内全域に広げようと呼びかけています。これは私の職務として取り組んでいることでもあります。以下では、身近な例をあげてご紹介したいと思います。

### ボランティアによるビオトープの保全

鴨島町江川の湧水は、夏冷たく、冬温かい不思議な水です。しかし、江川遊園地の近くに数力所

湧出する吉野川の伏流水が、多津美橋にさしかかる辺りから、小魚を狙うアオサギがたたずみ、ヤナギが川面に枝葉をたれ、アシが生い茂る自然豊かな場所があることは、あまり意識されていないかも知れません。そこには、子供達が浅瀬でカニやエビを追う姿も時折見られることもあり、鴨島中央公園付近で都市公園に姿を変えるまでの間、ノスタルジックな景色が味わえます。生活排水による汚染は否めませんが、川の中や岸辺に点在するゴミはありません。この美しく貴重な景観が、地域のボランティアの努力によって保たれていることは、地元では周知のことです。こうした地道な環境改善活動こそが、今、私達がなすべきことではないかと痛感します。

### 学校におけるビオトープの創出

昭和小学校の中庭で行われた興味深い取り組みについて触れてみましょう。

当初学校では、卒業記念として中庭に池を作り在校生が金魚を育てる計画をしていました。しかし、博物館の佐藤学芸員のアドバイスを心得て計画は大きく様変わりしました。みんなで穴を掘り、水漏れ防止のシートをはり、土を固め、石を築いて、苦心<sup>くしんさんたん</sup>惨憺<sup>さんたん</sup>やっと出来上がったばかりの中庭の池には、生き物は全く放されませんでした。また、周囲にはわざと何も植えられていません。卒業生達は、この池に自然から与えられる大きな喜びを

在校生に送りました。この素晴らしい生き物の棲み家を一番最初に見つけるのは「トンボだろうか？」それとも「カエルだろうか？」子供達は胸をワクワクさせながらその後も観察を続けているそうです。これは、環境教育を進めるための、学校ビオトープの例です。

### 公共事業によるビオトープの復元

次代の新しい公共事業として、自然再生事業が話題になっていますが、土成町宮川内谷では県事業により、河川ビオトープの復元が実施されています。自然石を積み上げた護岸や、土盛りによる川岸、ワンドの復元や河畔林の造成により、魚類をはじめとして多様な生物の生育生息環境が整えられています。

また、そのほか、ため池や小川<sup>けいはん</sup>、畦畔<sup>けいはん</sup>などがある農山村地域においても、自然環境の保全に向けた事業が少しずつ進められています。

未来のために私たちがしなければならないことは、美しく何物にも代え難い価値を有する自然環境を次世代に残して行くことです。「ビオトープ」への取り組みは、人間が自然と共に歩んでゆくための第一歩と言えるでしょう。今後この活動を多方面に拡大してゆくためにも皆様のご参加を、ぜひお願い申し上げます。



鴨島町江川



昭和小学校の中庭

## 博物館紹介 19



## 鳴門市賀川豊彦記念館

たけち ただよし  
武知 忠義（友の会会員）

この記念館は、鳴門市民・徳島県民をはじめ広く全国の人々から寄せられた浄財で建てられ、本年3月21日にオープンしました。長い不況の下、1億2,000余万円の目標額を達成することができ、改めて賀川豊彦の偉大さと、その精神を継承することへの熱意を感じました。ここでは、設立に携わった立場から館を紹介したいと思います。

内容づくりに当たっては、1) 賀川豊彦(1888～1960)の活動を、彼の生きた時代背景を踏まえて描くこと、2) 徳島との関係に力点を置くこと、3) 世界的な活動の足跡をクローズアップすること、の3点について申し合わせを行いました。

これらの方針に基づき、時代順に見られるよう、次の10テーマを設定しました。

1. 生い立ちとふるさと徳島、2. 死線を越えてスラムへ、3. 激動の時代に立ち向かって - 大正デモクラシーの先頭に -、4. 理想社会の建設を目指して - 協同組合運動 -、5. 戦後日本の再生に向けて、6. 世界平和を求め続けて、7. 愛の教育者 - 魂の彫刻 -、8. 賀川ハル - 夫とともに -、9. 超人的な著作活動、10. 世界的な活動の足跡。

まず「生い立ちとふるさと徳島」では、賀川家と父の生家磯部家のこと、賀川家周辺の自然、賀川の受けた教育、殊に旧制徳島中学校時代の勉強



展示室のようす



賀川豊彦記念館の外観

ぶりや家の破産、徳島における人的つながり、遺跡などを紹介し、徳島時代の生活の中から彼の精神基盤が培われたことを表現しました。これをうけた諸コーナーで、神戸スラムでの救済運動をはじめとして、労働運動、農民運動、普選運動、災害救助活動、生協運動、平和運動などの多方面にわたる社会運動や世界的な活動の足跡、広範囲の著作活動、教育への情熱と取り組み、妻ハルの貢献などを紹介しました。

賀川豊彦記念松沢資料館（東京）から多くの資料貸与を受け、また、賀川の薫陶を受けた人々からも多数の資料を提供いただき、展示することができました。

このほか、図書資料室を設け、賀川の著作や関係書などを備え、賀川のことならおおよその調べがつくよう整備しました。

今後は、賀川精神にちなんで活動する館とするため、多様な行事を予定しています。積極的にご参加いただければ幸いです。

## 鳴門市賀川豊彦記念館

開館時間	午前9時30分～午後4時30分
入館料	大人200円、小人100円
休館日	第2・4・5月曜日(祝日の場合は開館)、 祝日の翌日(日曜・祝日の場合は開館) 12月28日～31日、1月4日～6日
所在地	鳴門市大麻町松字東山田55-2 TEL 088-689-5050

友の会行事報告

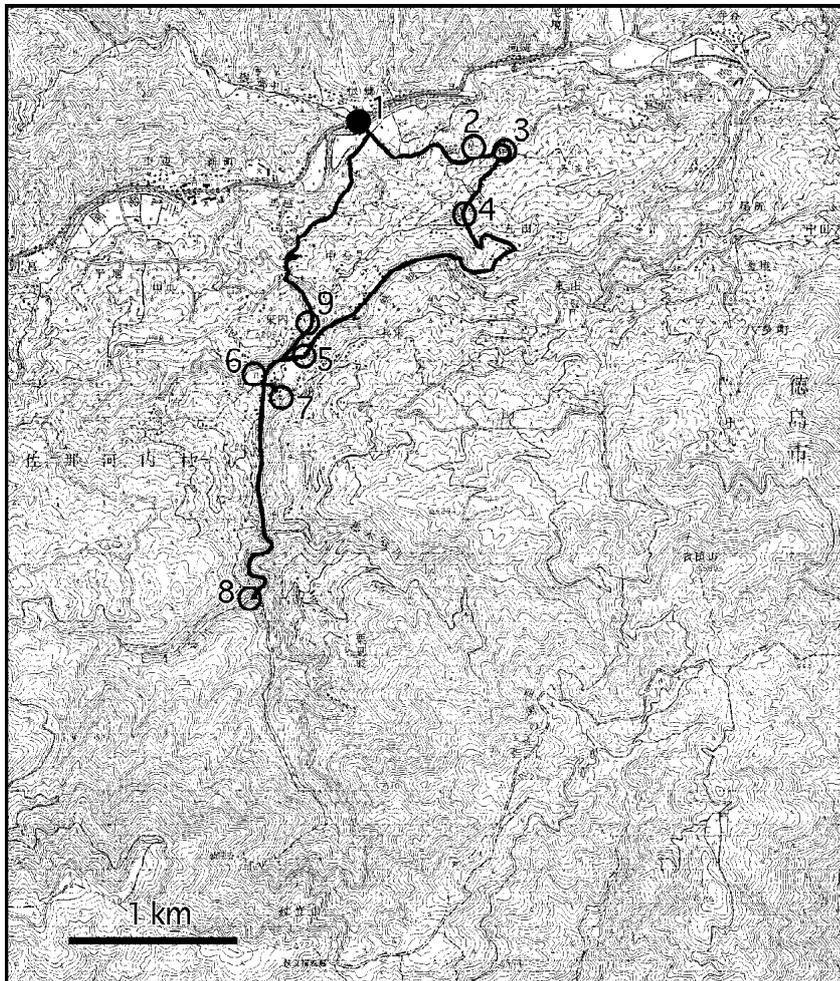


園瀬川探検（第7回）

第7回目は、2002年6月16日（日）に実施しました。参加者は今までで一番多い15名でした。加えて事務局からは佐藤陽一（脊椎動物）、小川誠（植物）、中尾賢一（地学）の3名の学芸員と、上野秋利（普及係）が参加しました。

今回は、園瀬川本流から外れて、支流の中では

最も長い嵯峨川に沿って歩きました。行程は9.3kmでした。大きな見どころとしては、嵯峨峡の岩や地層がありました。これらはかつての海底火山活動によってできたものです。中尾学芸員に現地で説明してもらいました。



第7回ルートマップ（国土地理院1/25000地形図「阿波三溪」より）

- |                   |                             |
|-------------------|-----------------------------|
| 1. 出発 / 終点の根郷川合流点 | 6. 天一神社（石垣に枕状溶岩・ハイアロクラスタイト） |
| 2. 水生植物が豊富な溜池     | 7. 宝蔵寺                      |
| 3. 御間都比古神社        | 8. ヒヨノ谷川合流点（輝緑岩の岩脈、石灰岩の礫）   |
| 4. 峠の地藏，秋葉神社      |                             |
| 5. 三体の祠（コードラさん）   |                             |

## 参加者の感想

園瀬川探検は以前から参加したいなと思っていたのですが、家業が忙しくて参加できずにいました。今回は農閑期でもあり、初めて参加させていただきました。

6月16日、文化の森を出発して一路佐那河内村の根郷を目指し、そこから園瀬川を渡って山路を歩きながら嵯峨川を目指しました。学芸員の話聞きながら、ぶらぶらがやがやと涼風に吹かれながら田舎路をのんびりと歩くのも、自動車に乗って忙しく走り回っている私には、めったにない心の洗濯でした。

途中、御間都比古神社<sup>みまつひこ</sup>に立ち寄ると、珍しく私の祖母の里の橋本さんにお会いして、お互いにこんな所で突然の出会いにびっくりして立ち話をし、神社の由来等を聞きました。なんでも農業の神様で、秋には盛大な祭があるとのこと。それから途中、山の中腹にある地蔵さんの由来を聞



嵯峨峡（天一神社上流の橋より）



御間都比古神社で聞き取り

いたり、農家の庭先にあるヤマモモの木が大きな実をつけているのにびっくりしたりして、天一神社に着きました。お弁当を食べた後、神社の前の石垣の中の枕状溶岩<sup>まくらじょう</sup>の説明を中尾さんより受けました。

人間もまだこの地球上に存在していなかった大むかし、海の底で火山から生まれたこの石が不思議なことに色々の変化の後に、この社の石垣におさまっているとは、考えただけでも地球の不思議さとロマンを感じさせるものがあります。

その後は、嵯峨川を一路徳円寺の方へ向かって山路を歩き、途中橋の下で中尾さんより石の説明を受けました。私は地質学に特に興味があり、色々とお聞きしました。石灰岩と他の白い石との見分け方は、ハンマーの角でこすると石灰岩はやわらかいので傷がつくからわかると言われ、1ついいことを覚えた嬉しかったです。帰りは坂道なのでスピードが付き、早く根郷の駐車場に着きました。

私は石とか化石とかが好きなので、これに関連した行事があればまた参加したいと思います。後で聞きますと、往復で約7キロ歩いたそうです。皆さん、「園瀬川探検」は健康にいいですよ。

（村瀬 義敬）



枕状溶岩の観察

友の会行事報告



秋の研修会 小豆島ツアー

9月8日、「自然がいっぱい 小豆島ツアー」と銘打ち、秋の研修会が行われました。会員42名に加え、事務局から3名が同行し、天候に恵まれた旅を満喫しました。ここでは、参加者から寄せられた感想文を二編掲載します。

小豆島は、高松出身の私達にとって、小・中学時代の思い出の場所です。50年の変化を見るために、秋の研修会「小豆島ツアー」に夫婦で参加しました。

当日は天候にも恵まれて徳島を出発、車中、寺戸会長から香川県の地形・地質の概要、小川学芸員から植物と絶滅危惧種、中尾学芸員から地質の特徴をお聞きし、その熱意で研修意欲が向上しました。

高松港からフェリーで土庄港へ。港湾施設は整備され今昔を実感しました。

バスは情緒ある町並を通り池田町へ。小川学芸員からオリーブの説明を聞き、内海町の小豆島民



歴史民俗資料館を見学

俗資料館に到着しました。場内にあるオリーブの実に触れて楽しみました。館内には古い生活用具が展示されており、高齢者の懐かしそうな顔が見られました。

次に紅雲亭へ。途中、寺戸会長から火砕岩地質と侵食の説明がありました。紅雲亭からさらにロープウェイで頂上寒霞溪へ。急峻な地形と雄大な渓谷を写真に収め、素晴らしい秋の紅葉を想像しました。頂上では、大パノラマを満喫。紅葉狩りのお勧めのポイントです。

昼食後、銚子溪東方道路沿いに移動し、露出した玄武岩溶岩の細かい板状節理を見学しました。中尾学芸員から讃岐層群との関連を勉強し、小片



寒霞溪にて

を持ち帰りました。バスは星ヶ城跡近くを通過し、ひと時歴史に口マンを馳せました。途中、子猿を抱えた母猿が見え、車内では歓声がわきました。バスは海岸線に出て福田へ。絶滅危惧植物「フクド」を観察し、植物保護の難しさを痛感しました。さらに北側に迂回して石切り場の岩層を見て、危険な作業に思わず息を呑みました。

大坂城残石記念公園には、大坂城築城のために切り出した石材の残石（残念石）が並び、往時の困難な搬出作業を偲びました。室内展示場には、土庄層群の四海層から産出した貝化石があり、一見の価値があります。

最終は、北西海岸の小江地区。中尾学芸員の案内で、土庄層群の四海層に属する砂岩層を見学しました。四海層は浅い海に堆積した地層であり、残石記念公園の貝化石の出土層と共通しています。

研修も無事終わり徳島へ。事務局のみなさん、ありがとうございました。若い人々とともに、楽しく研修できたことを感謝しています。また、参加を希望しますので、よろしくお願いします。



小川学芸員よりフクドの説明を受ける



中尾学芸員が活躍した地質・岩石等の見学

夫と二人で初参加した友の会行事でした。張り切りすぎて当日の1週間前にバス停で長く待つというハプニングもありました。

いよいよバスは高松へ。他の熱心な参加者の方々を見て、友の会の行事は盛会なんだと合点しました。まず、小豆島民俗資料館でオリーブの木を見て紅雲亭へ。そして、ロープウェイで溶岩を見ながら寒霞溪へ。バスの中で聞いた寺戸先生の詳しい説明によると、讃岐の地層や岩石は徳島と違い、花崗岩でもろく、崩れやすいとか。山の様子も生成する過程で違い、それが植物、動物、産業、歴史へと大きく影響するのかと荒っぽく納得。植物に少し興味があるので、どんなものが生えているのか楽しみにしつつ、寒霞溪に着くと、ウリハダカエデの花が出迎えてくれました。昼食後の小休憩中に小高い丘へ散歩。鳥居の所までにある可憐な草花が名前がわからないので、とりあえずデジカメに収め、後で聞くことにしました。

記念撮影後、美しの原、銚子溪まで、松林のすばらしい快適な道をドライブ。道沿いにある板状節理の説明を聞き、玄武岩の一片を頂戴してまた元の道へ、くねくねと八十八ヶ所の説明を聞きながら福田へ。海沿いから石切場へ。途中フクドの見学。河口に降りて手に取りたかった。石切場はほとんど知識がない所でしたが、歴史のある産業として島の特徴を知りました。大坂城残石記念公園では石垣の石として採掘されたものの、搬出されずに残ったものが置かれ、その時代の人々の苦勞もしのばれ、興味深く思いました。見覚えのある貝化石は土庄層四海層というところから産出したとか。化石に興味深く眺めている人、そのまわりの海岸をみている人、歴史を刻んだ石碑を読んでいる人等、皆それぞれに学芸員の話の聞いたりしていました。博物館の方々のサポートのお陰で自分の知らない分野の話聞く機会を頂けたことを深く感謝しました。その後、ぐるりと小豆島を一周して、昔海岸であった所の化石化した生物の

巢(?)まで見学。美しい夕方となり、フェリーで高松へ。

こうやって走り書きしてみますと、一つ一つのシーンは思い出しても具体的な用語やお話が出せず残念です。資料もよく読み返し、上手ではないデジカメの中の花の名前も教えて頂こうと思っています。企画していただいた上野さん、寺戸先生、学芸員の方々、参加していた皆様方、ありがとうございました。またよろしく願います。(太田 春江)



## 充実する友の会

さかべ ともはる  
坂部 友治 (元友の会会員)

私が友の会に初めて入会したころ、名簿も会報もありませんでした。それでも、眉山のふもとの旧館では思いもよらなかった組織ですから、たいへん新鮮な魅力を感じました。

常設展示のどこかのコーナーで、時間を気にすることなく、ゆったりと過ごせるのは、当初の会員の最大の特典でした。たとえば、ある日は蝶の展示だけを心ゆくまで楽しんでくれるのです。別の日は貝類とか。

最近の友の会は充実の一途をたどっていますが、私は加齢が進んで介護保険の支援を受けるようになり、今年は友の会を休んでいます。そこで若い会員の輪が広がってくれることが、今の私の何よりの願いなのです。

ところで、行事計画が量・質ともに充実してきたのに、会員数が伸びず、そのため、予算面は必

ずしも十分ではないようです。この友の会のように持続可能な学習の場には、もっと光が当たって多数の参加があってほしいものです。

友の会が責任を負っていることではなく申し訳ないのですが、感想を追加させてください。何かといえば博物館の入場料のことです。小中高生も平日は入場料がいるという現状が不満なのです。

学校行事による振替休日が有料では見学に来てくれませんよね。不登校の児童生徒が曜日に関わりなく、ふらりと訪れてくれて、才能が花開くなんて期待は甘すぎるのでしょうか。ちなみに私は元中学校教員です。

友の会の事業が充実するにつれて、私が気にしているのは、会員のニーズの多様化に伴う不平が増えること、その不平が事務局メンバーに転嫁されることです。その克服のためには、会員相互の連携とかボランティア精神とか、友好的なムードが望ましいと思います。

長い間、参加してきた経験から、一人でも多くの方にこう呼びかけたい思いがしています。「博物館友の会って楽しい集いなんだよ。いっしょに試してみようよ」と。

## 《事務局からのお知らせ》

会報「アワーミュージアム」の原稿募集  
みなさんの原稿を募集しています。ぶらりと名所・旧跡を訪ねたことや身の回りつどの出来事で博物館に関係あることなどを、どんどんお寄せください。

冬の研修会「初冬の吉備路を訪ねて」に参加を！  
11月30日(土)・12月1日(日)の両日、岡山県西部(総社市・高梁市など)の史跡見学を中心とした研修を行います。多数の方の参加をお待ちしています。

## 第20号

2002年10月10日 発行：徳島県立博物館友の会  
〒770-8070 徳島市八万町向寺山 徳島県立博物館内  
TEL 088-668-3636 FAX 088-668-7197

徳島県立博物館友の会会報

アワーミュージアム



No.20

October  
2002  
Tokushima  
Prefectural  
Museum